

2017年3月19日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 23 章 8～17 節

説教：いのちをかけた者の血

はじめに

およそ 400 年前、日本の政治家であった徳川家康は死んでから日光東照宮に神としてまつられ、崇拜されたと言われます。もちろん、家康は神ではありません。家康を神とすることで、徳川家の威光を高め、国を支配しやすくしていく策略があったのでしょう。

前回は 23 章 8 節までを見ました。5 節に「まことにわが家は、このように神とともにある」とありました。これだけ読めば、ダビデ家は神の家柄であると言おうとしているように思います。もしそうなら、ダビデのしていることは徳川家康とほとんど変わりません。でも聖書は私たちの救いのために書かれている書物です。ひとりの政治家をほめたたえるために書かれているわけではありません。そこで注意深く読み直していくと、5 節はダビデの子孫として来られる救い主が来られることを預言していたことばであった。そういうことを前回見て参りました。

今日はその続きです。ここには、三人の勇敢な兵士が出てきます。王の命令とあらば忠実に従い、危険を顧みずに進んで行く勇敢な兵士のことが書かれています。ダビデはこんな部下を持つほどのすばらしい王さまであった。そんなふうにも読めます。でも、聖書はダビデをほめたたえるために書かれているのではない。ここも私たちの救いに関係しているはずです。いったいどんな関係があるのか。これから見てまいります。

## 1 三勇士

### 1) 三人の名前

8 節から読みます。「ダビデの勇士たちの名は次のとおりであった。補佐官のかしら、ハクモニの子ヤショブアム。彼は槍をふるって一度に八百人を殺した。」続く 9 節ではエリアザル、11 節にはシエマの名前が出て来ます。これを読んだだけでも、彼らの強さは一目瞭然です。ただ強いばかりではありません。この三人が特別に「勇士」と呼ばれているのには、13 節以降に書かれている出来事が関わっております。

### 2) アドラムのほら穴にいたダビデ

13 節。「三十人のうちのこの三人は、刈り入れのころ、アドラムのほら穴にいるダビデのところへ下って来た。ペリシテ人の一隊は、レファイムの谷に陣を敷いていた。」

この出来事がいつのことであるのか。話はさかのぼって、ダビデがまだイスラエルの王になったばかりで、エルサレムにやっと都を移したばかりのころのことです。王になったと言っても、国内の治安はまだ不安定です。すぎがあればペリシテ人が攻めてきて国を荒らしていきます。ダビデはそのたびごとに自ら陣頭に立って戦いに出かけます。このときもそうでした。敵と戦うためにエルサレムを出発し、アドラムのほら穴に隠れてペリシテ人を迎え撃とうとしていました。一方ペリシテ人は、このとき、ベツレヘムのまわりに陣を張って、ダビデとの戦いに備えています。

3) だれか、井戸の水を飲ませてくれたなら  
そのとき、ダビデはこのように言います。

「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を  
飲ませてくれたならなあ。」

アドラムのほら穴に水がなかったわけ  
ではないでしょう。仮に水が不足していたとし  
ても、わざわざ敵が包囲している町から水を  
汲んでくる理由などありません。そもそもダ  
ビデが隠れていたアドラムのほら穴とベツ  
レヘムは、距離にすれば20キロメートルも  
離れています。それなのになぜかダビデがベ  
ツレヘムにある井戸の水を飲みたいと言  
うのです。

三人の勇士はダビデが語ったこのことば  
を、王の絶対的な命令と聞き取り、すぐに  
出かけます。敵の正面を突破して、ベツレ  
ヘムの町に入り、井戸の水を汲んで持ち帰  
ってきました。

## 2 ダビデ

### 1) 注いで主にささげた

ところがその水をダビデは飲もうとし  
ません。その水を注いで主にささげます。みな  
さんはどう考えるでしょうか。せっかくいの  
ちをかけて苦労して汲んできた貴重な水で  
はないですか。普通ならば、「大義である。  
よくやった」と言って三人の労をねぎらい、  
たとえそのときは飲みたくなかったとし  
ても、三人の前でおいしそうに飲み干す。そ  
うすべきではないでしょうか。ところがダビ  
デは、この水を注いで主にささげます。「注  
いで」ということですから、地面に流して  
しまったのか、なにか祭壇のようなものに  
振りかけたということでしょう。いずれに  
しても、「もったいない」という声が聞こ  
えてきそうです。飲まないのならば、最初  
から「飲みた

い」と言わなければよかったです。

### 2) 私がこれを飲むなど絶対にできない

組織で働いていると、まれにですが上司  
からちゃぶ台返しのような話が突然出て  
来て、それまで苦労して準備してきたもの  
が全部無駄になることがあります。そんな  
ことをしていたら部下はやる気をなくし  
ます。上司に仕えたいという忠誠心もし  
ぼんでしまい、不信感だけが募ります。

ここでも三人の勇士が一生懸命がんば  
って汲んできたのに、その水を地面に流  
してしまっています。もちろんダビデは、  
ころころと気分によって自分の意見を変  
えて部下を振り回すようなワンマン社  
長ではないはずです。もしそうであるなら  
誰もダビデを信頼してついてくるはずが  
ありません。

なぜ飲まなかったのか、その理由につ  
いてダビデはこう説明しています。17節。  
「主よ。私がこれを飲むなど、絶対に  
できません。いのちをかけて行った人  
たちの血ではありませんか。」

目の前におかれているのは、ベツレ  
ヘムの門にある井戸から汲んできた水  
です。しかしダビデはこれをいのちを  
かけて行った人たちの血であると言  
っています。水が血に変わったわけ  
ではありません。水は水です。と  
ころが敵の正面を突破して、いのち  
をかけて汲んできたものはたとえ水  
であろうとも、それは人の血であ  
る、いのちに値する。そのような高  
価なものを、たとえイスラエルの  
王であろうとも口にすることは  
できない。ただこれを受けるに  
ふさわしいのは、主だけである  
と言うのです。

### 3) 王の口から出たことば

最初のきっかけは、「だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ」と語ったことが始まりました。ダビデはただ思いついたことを冗談のように言っただけだったのかもしれませんが。「水一杯のためにいのちをかけるなどばかげた話だ。」そう思って、そばにいる者たちがあははと笑うのを期待したのかも知れません。ところがこれを冗談ではなく、まじめな話として受けとめたのが三人の勇士たちです。たとえどんなことばであろうとも、王の口から語られたことばは絶対であると考えました。ある人はこれを見て、「融通が利かない」とか「杓子定規」、「頭がかたい」とか言うでしょう。でもこの三人は、王の口から出たことばは絶対であると信じて、いのちをかけていきました。そして聖書はこの三人の態度を非常に高く評価しています。

### 3 イエス・キリスト

#### 1) 神のことば

どんなことばであろうとも忠実に従う、勇敢な部下をもつダビデ。それほどダビデはすばらしかった。ここには、そんな自慢話が書かれているようにも見えます。でも何度も言いますが、聖書は人の救いのために書かれています。いったいこの所のどこが救いと関係があるのか。それを見ていきます。

ダビデは最初、これは冗談だからまさか真に受ける者はいないだろうと考えていました。ところが、ダビデは今やイスラエルの王なのです。たとえ冗談であろうとも、王の口から出たことばはむなしく消えてはならない。三人の勇士はそのように受けとめました。その結果、忠実な部下のいのちを危険な目にさらさせてしまいました。

この出来事を通して、ダビデは、王の口から出ることばがどれほど重いものであるのかを学んでいったはずですが。人間の王でさえそうなのですから、私たちの王である神が語られたことばはそれ以上ということになります。

神のことばである聖書にこうしなさいと書かれているのならば、そのようにしなければならぬはずですが。こうしてはいけませんと書かれているのならば、絶対にしてはならないはずですが。でもどうでしょうか。私たちはいつも神に忠実に従っているのか。従いたいとは思うでしょう。でも現実はそうではない。従っていない自分を認めるしかありません。

#### 2) いのちをかけた者の血

では神のことばに忠実に従う者がだれかいたのでしょうか。ひとりだけおられました。私たちのところに人となって来られたイエス・キリストです。神である方なのに、この方は人の姿をとられ、私たちと同じようになられました。いったいなぜそのようにされるのでしょうか。思いつきですか。いいえそうではない。アダムとエバが神に逆らい、罪を犯したとき、神は人を救うためにいのちを捨てるとの計画を明らかにされました。神が語ったみことばはむなしく消えてはなりません。ダビデが冗談として語ったことばでさえそうなのですから、神のことばはなおさらです。救い主として来られたイエス・キリストは、ご自分が語ったみことばに忠実に従われました。

その従う姿について、ペリピ書2章6～8節にこうあります。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられない

とは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

なぜ十字架の死にまでも従われるのでしょうか。もともと従う理由があったのか。いいえ、何もないのです。ただ神ご自身が一方的に、私たちのもとで卑しくなりたいと願い、罪人のために死ぬことを決心してくださったのです。その結果、この方からだけは十字架で裂かれ、血が流されました。私たちに飲ませるためによみにまでくだって行かれ、深い井戸からいのちの水を汲み上げます。そのために血が流されました。

私たちは今聖書のみことばを読んでいます。神が語ってくださったみことばを聞いています。このみことばはどのようにして私たちに届けられたのか、考えたことがあるでしょうか。もし主イエス・キリストが十字架でいのちをお捨てになることがなかったなら、聖書にどんなことが書かれていたとしても、読む価値などひとつもなかったでしょう。でも今私たちはこれを読みます。聞きます。なぜですか。主が血を流してくださったからではないですか。神がいのちを捨ててくださったから、だから私たちは聞きます。神がそこまでして与えてくださったものであるならば、ここに本当のいのちがあるはずだ。そう信じて聞いています。

ダビデは、いのちをかけて行った人たちの血を飲むことなど絶対にできないと言い、それを主にささげました。ならば主が与えてくださる水はどれほどの高価なものでしょうか。

主が与えてくださるのちの水を、豊かにい

ただけることに心から感謝したいと思いません。